

開催地名	沖縄県読谷村
開催日時	令和7年12月4日(木) 19:00 ~ 20:30
開催場所	読谷村 文化センター 中ホール
語り部	佐藤 裕香理(熊本県熊本市)
参加者	読谷村地区防災委員及び読谷村長 80名
開催経緯	災害が少ないと言われている沖縄であるが、最近では北部の水道管破裂による広域での断水があったように、災害はいつ襲ってくるか分からないもの。日頃から準備することが重要な課題となっている。講演を聞いていただき防災への意識を高めていただける機会になってほしい。
内容	<p>「誰一人取り残さない防災 —熊本地震から学んだ地域力の必要性—」</p> <p>(1)熊本市江津湖の地域特性と防災への取り組み</p> <p>私の住む江津湖は益城町から車で15分ほどの場所にあり、昔からの住民と移住者が混在する地域である。子どもが多く大規模校を抱える一方、高齢化も進んでいるが、多くの高齢者が地域活動に関わっている。湧水が多く、避難所となる小学校にも湧き水があり、断水時に助けとなったが、過信はできない。</p> <p>地域では祭りや行事が多く、自治会、学校、PTA、子ども会、消防団などの横のつながりが強い。消防団に入ったきっかけは、九州北部豪雨で水害の危険を実感し、避難所運営の不安を目の当たりにしたことである。女性消防団を立ち上げ、その後の熊本地震では実際に避難所運営に携わった。</p> <p>(2)熊本地震発生と避難初動</p> <p>2016年4月14日9時26分と16日1時25分、熊本で震度7の地震が相次いで発生した。前震・本震を含め4200回以上の余震があり、震度6以上は7回に及んだ。家屋倒壊や道路寸断、ライフライン停止、電話不通という深刻な状況であった。避難者は熊本県内で18万人に上ったが、幸い地震保険に加入していた筆者は備えの重要性を実感した。地域では、家具や家電が倒れ、道路や橋、マンホールも破損した。旧耐震基準の木造家屋は倒壊し、通行不能となる箇所が多数あった。前震直後、筆者は子供の安否をLINE電話で確認しながら帰宅したが、実家の祖母宅は倒壊し、家族と共に避難所へ向かうこととなった。避難所は当初閉鎖されており、とにかく寒かったため、市らの指示が出ていなかったが、自ら開錠して受け入れを開始した。実際に災害が起こった時には、マニュアル通りにいかないということを実感した。</p>

(3) 避難所運営と物資の配布

避難所では、炊き出しを優先して行った。湧き水や農家からの提供米を利用し、即席かまどでご飯を炊き、ラップを敷いて食器の洗浄を省略するなど工夫した。避難者名簿や簡易カルテも作成し、薬や健康管理の情報を共有した。男性2名・女性2名の一般人消防団と共に避難所や校区全体の状況を確認し、生活支援を行った。

物資の到着は前震から4日後、本震からは3日後で、パンや水、缶マフィンが少量届くだけだった。トイレは限られ、バケツリレーでの水確保が必要であった。必要物資のリストを各町内の児童会や自治会を通して集め、PTAや親父の会の協力で配布を行った。4階建ての団地では、水圧不足で上階まで水が上らず、水が出たのがゴールデンウィーク明けだった。避難所では心のケアや生活支援が課題となり、帰宅支援のため片付けや家屋固定作業も行った。その後、20日が経って避難所は閉鎖された。

(4) 個々の備えと防災倉庫の現状

防災倉庫を見たことがない人も多いが、必ず中身を確認しておくべきである。熊本地震の反省から、避難所に物資があると過信され準備を怠る人がいることが分かった。例えば、うちの避難所には100名分の3日分しか備蓄がないため、800人避難では全く足りない。住民には「これだけしかないの自分で準備しておくように」と周知することが重要である。また、個々の備えも場所に応じて異なる。沖縄など津波の心配がある地域では、防災リュックを準備しても地震時に取り出せない場合がある。水害や台風なら備えられるが、地震の場合はまず自分の命を守る行動を優先すべきである。

(5) 避難所の開設と運営

避難所の開設は誰が行うかを事前に決めておくことが必須である。鍵の管理や開設の遅れを防ぐため、複数の担当者を用意するのが望ましい。運営は地域主体で行い、行政職員は支援や調整の役割に徹する方が効率的である。熊本地震では日替わりの職員体制で引き継ぎが困難だったが、ボランティアと行政の役割を明確化することでストレスを減らせる。また、避難所はホテルではなく、物資や生活用品も限られるため、女性の視点を運営に取り入れることが重要である。給水ライナーなど、男性には分かりにくい要望も女性を交えることで円滑に対応できる。物資の配

布も公平に行う工夫が必要である。

(6) 地域防災の取り組みと「かもしれない」の想像力

熊本地震後、7年間何も進まなかった校区で、再び防災活動を始めることになった。熊本女性防災育成プロジェクトの仲間や地域のキーマンの協力で、防災訓練や連絡会が実施され、参加者も増えた。

防災に正解はなく、重要なのは自分と家族の命を守ること。「かもしれない」を沢山想像して、家族や地域の人と共有することで様々な気づきが生まれ、よりよい備えや地域に適した防災につながるのではと考える。



開催地より

本日の講演会の内容を各自持ち帰り、今一度地域防災について考えるきっかけとしてほしい。